報告：2 年次メジャー基礎ゼミナール長田ゼミのフィールドワーク

執筆：長田華子（人文社会科学部法律経済学科）

2025 年度のメジャー基礎ゼミナールでは、前期、後期の 1 年間かけて「日本における外国籍の人びとが抱える問題を考える」をテーマに研究活動を行ってきました。前期には、鳥井一平著『国家と移民―外国人労働者と日本の未来』を輪読し、日本における外国人労働者の受け入れの歴史や現状について学び、議論しました。前期の議論を踏まえ、後期ではゼミ生 12 名を 3 つのグループに分け、グループ活動を行いました。A 班は日本における難民問題ついて、B 班は技能実習制度とその課題について、C 班は茨城県常総市の外国人の移住についてテーマとして掲げ、調査を実施しました。その中で、A 班と C 班は、実際にフィールド調査を行い、外国籍の人びとが抱える困難に向き合って支援をしている方々やその当事者にインタビュー調査をする機会を作りました。

A 班（学生 4 名）は、1994 年に会を設立し、翌年から茨城県牛久市にある東日本入国管理センター（通称、牛久入管）に収容されている人々への面会活動を現在に至るまで行っている「牛久入管収容所問題を考える会」（通称、牛久の会）を事例に、調査をすることになりました。A 班では、フィールド調査を 2 回行いました。

1 回目は、12 月 14 日（日）につくば市役所コミュニティ棟で行われた牛久の会の年間活動報告会 2025 に参加し、記念講演として報告された安田浩一（ノンフィクションライター）氏の「外国人ヘイトに抗う―差別と排除の現場を取材して」を聞き、その後、牛久の会の代表の田中喜美子さんや会の支援者の方々、また収容を経験した当事者の方々に話をお聞きしました。

2 回目は、1 月 21 日（水）に、牛久の会が毎週欠かさず行っている面会交流を体験するために、牛久入管を訪問し、面会交流を行いました。学生 4 名にとっては初めての体験（引率の教員である長田も）であり、緊張した様子でしたが、被収容者の方々との面会は貴重な経験になったようです。当日は、2 人の方と面会しましたが、被収容者のうちの 1 人は英語しか話せないということを事前に確認しており、学生 4 名は事前に英語での質問を用意し、面会に臨みました。英語でコミュニケーションをとりながら、被収容者の方のおかれた状況を理解するということは、本学部のカリキュラム・ポリシーの実践的英語力・国際化志向やコミュニケーション能力の育成に該当しており、非常に重要な学びの機会だったと考えております。

C 班（学生 3 名）は、12 月 13 日（土）に常総市の外国籍の人びとが抱える困難に向き合って長らく活動をしている、茨城 NPO センター・コモンズを訪問しました。コモンズが 9 月以降、毎週土曜日に実施している外国にルーツを持つ中学生を対象とした学習支援の場を見学し、その後、コモンズ代表の横田能洋氏から同 NPO の活動内容や外国籍の方々が感じる困難について話を伺いました。参加した学生 3 名は、実際に、活動の現場を訪問し、観察し、また支援者の方々にインタビューをすることで、文献やインターネットなどから得ら

れる情報とは異なる「生」の情報に触れる体験をできたことは、大きな学びの機会であったと感じております。グループのメンバーで、事前に、常総市の外国籍の人びとの状況やコモンズの活動内容を調べた上で、質問項目を検討し、調査をすることは苦労も多かったようですが、フィールド調査を踏まえて、学びの意欲が一段高まったように感じております。

フィールド調査を実施しなかったB班も含めて、3つの班は、1月7日（水）に開催された経済学・経営学メジャーの学生全員が参加するプレゼン大会にて学んだ成果を報告しました。

この度、学生がフィールド調査を行う際の交通費として後援会からのご支援を頂くこととなりました。ありがとうございました。

A班　1回目フィールドワーク

（つくば市役所での牛久の会年間活動報告会、2025年12月14日NPO法人NEWつくば撮影）

C 班　12 月 13 日、常総市、茨城 NPO センター・コモンズにて撮影